広島県視察について（報告）

中央教育審議会　初等中等教育分科会
個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方に関する特別部会
義務教育の在り方ワーキンググループ

〇視察の目的

・今後の初等中等教育の在り方を議論するに当たっては、全国各地の教育現場の状況を適切に把握し、子供や教師をはじめとした学校関係者、保護者等の意見を踏まえることが重要である。
・令和５年４月に施行されたこども基本法においても、こどもに直接関係する全ての事項に関して、年齢や発達の程度に応じてこどもの意見を表明する機会が確保されることが基本理念として規定されており、当事者の声を直接聞くことの重要性はこれまで以上に増している。
・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた学校教育の在り方に関する特別部会義務教育の在り方ワーキンググループにおいては、「義務教育に関する意識に係る調査」などを活用して当事者の意見も参考にしつつ、令和５年１２月に「義務教育の在り方ワーキンググループ中間まとめ」をまとめたところである。
・「中間まとめ」の内容について、関連する取組を実際に行っている事例を確認するとともに、当事者の声を直接聞くことでさらに充実した審議を行うため、視察を実施した。

〇視察先

・広島県教育支援センター　ＳＣＨＯＯＬ“Ｓ”（広島県東広島市）
・広島県廿日市市立宮園小学校（広島県廿日市市）
・広島県尾道市立高西中学校（広島県尾道市）

〇日程

令和６年１０月２日（水）～３日（木）

〇参加委員（一部の学校・施設のみ参加の委員を含む）

荒瀬特別部会長、堀田部会長代理、奈須 WG 主査、秋田 WG 主査代理、岩本委員、鍵本委員、柏木委員、黒沢委員、小柳委員、貞広委員、神野委員、中谷委員、野田委員、水谷委員、若江委員
※岩本委員、神野委員は特別部会委員としての参加。

１．広島県教育支援センター　ＳＣＨＯＯＬ　“Ｓ”　視察

●施設概要

・場所　　広島県立教育センター 特別支援教育棟 2F
・設置年　　令和 4 年
・利用者数　　約 50 人/日（来室 30 人、オンライン 20 人程度）
・職員数（常駐）　6 人

●施設の特色

・来室とオンラインによる、個々の実態や興味関心等に応じた学びを通じた不登校等児童生徒への支援を行っている。
・児童生徒自身が時間割（MY 時間割）を作成することができ、学習方法や内容の選択・自己決定ができる。
・児童生徒の利用目的に合った部屋を整備している（プレイルーム、学習室、工作室、オンライン配信スタジオ　等）。

●施設見学と子供たちとの対話

広島県教育委員会より施設全体について説明を受けたうえで、プレイルームや学習室、スタジオ S（オンライン配信スタジオ）等において、個別に子供たちとの対話を実施した。スタジオ S では、遠方に居住していること等により通所が困難な子供がオンラインチャット等を通じて活動に参加しており、今回の視察においてもチャットによるコミュニケーションを行った。

施設見学（プレイルーム）

オンラインチャットによる意見交換

●対話において子供から委員に寄せられた主な意見

・SCHOOL“S”は話を聴いてくれ、全部を受け入れてくれるところがいい。
・SCHOOL“S”に来る子は同じ心を持っているので話しやすく、何気ない会話ができるところ、学校に関係ないことが話せるところがいい。
・先生はやさしく、意見を尊重してくれるけど、悪いことをしたら怒ってくれる。
・一人で集中して取り組みたいことがあっても、家や学校ではできないが、SCHOOL“S”でならできることがうれしい。
・やっと心のよりどころが見つかった感じ。学校では居場所、よりどころがなかったのでこうやって見つかってうれしい。
・学校の嫌いなところは勉強をさせすぎるところや自由じゃないところ。
・子供が不登校になっているのは少なからず大人の責任もあるのではと思ってしまう。
・学校の授業はもっと面白くしてほしい。教師が自分で確かめていない「正しい」知識を教える授業ではなく、一緒に確かめたり考えたりする実験やフィールドワークなど。

●視察を踏まえた委員からの主なコメント

（通っている子供たちについて）

・子どもたちは、周りに気を使わず、素のままの自分で過ごせる環境を求めており、SCHOOL“S”という選択肢があることによって、多くの救われている子どもたちがいることが分かった。
・自分の感性や感情に鈍感でないと、既存の学校を泳ぎ切れない子供が多いのだと受け止めた。今、学校に通って平気な「ふりをしている」子供たちにも、何かできることはないかと改めて感じた。
・他者と一緒にいる時間を過ごしているというのは自宅で引きこもってしまっていることよりは良いことなのだろう。オンラインで関わっている子も、ロビーで動画を見ている子も、いずれも集中力があり、彼らの意欲を感じた。一方で、結果としてこのような子供たちを遠ざけてしまう学校が、いかに同調圧力が強く、揃えることを要求してしまっているかを再確認した。
・今回出会った子供の中には、関心事が学校で認められれば、段々と学校に来られるようになるのではないかと感じさせる子供もいた。従来、不登校は生徒指導の問題とされていたが、かなりの部分の子供は学習指導の問題なのではないか。

（支援施設について）

・学校で過ごしにくい子供がこのように他の場所を選択することができる仕組みはとても重要。その中で、子供の意思や声を尊重しようとされている先生方の姿勢を感じた。選択肢の多様化とともに、学校自体が少しでもこうした場所になることが必要。
・各学校に「ミニ S」があればよいという話、もっと街の中につくってほしいという話が

子供からあり、もっともだと思った。

・「多様な選択肢と自己決定」が基本になっており、いろいろな機能・環境が用意されている点が素晴らしい。県として取り組み、各市町との連携も進んでいる点、家庭、SSR、各市町の教育支援センター等、どこからでもオンラインで利用できる環境が整っている点も含め、全国に共有していく必要がある。

・教師がこういった場で不登校になった子供の声や想いを「聴く」という機会・経験を持つことは教師の資質能力の向上や魅力ある学校づくり、誰一人取り残さない学校教育づくりのために重要。

２．廿日市市立宮園小学校　視察

●学校概要

・開校　　平成２年４月

・児童数　208 人（令和６年５月１日現在）

●学校の特色

・自立した学び手を育てることを目指す姿として、自由進度学習に取り組み、個別最適な学びを実現するため、児童一人一人の学習進度や能力、関心度に応じて、多様な学びの選択肢を提供している。

●授業見学とその後の意見交換

６年生の５、６時間目を使って実施された自由進度学習の授業を見学した。授業では、社会・算数・理科の３科目の各単元について、教師が作成した学習シートに沿い、子供たちが学ぶ教科・順番を自分で選択しながら、教室のほか、学習室や廊下に設けられた「学習コーナー」や「学び深めるコーナー」の課題に取り組む形で進められた。

授業見学の実施後、子供たちと委員との対話を実施した。

学習室で個人や集団で課題に取り組む子供たちの様子

児童と委員との対話の様子

●児童との対話を踏まえた委員からの主なコメント

・自由進度学習の良さについては、「自由度が高いこと」「自分のペースで進められること」「いつでも自分のタイミングで質問でき、わからないまま過ごしてしまうことがない」という意見が多かった。

・「問題がわからない時は友達に聞くが、答えを教えてもらうのではない」と児童が言っていた。答えを教えてもらっても自分の力にはならないため、教えてもらう方法についてもしっかり友達と協議しているものだと思う。

・自由進度学習により、「計画する力、友達に聞く力、友達と協力する力」が付いたと言っていた。また、それが「社会に出てから役に立つ」という発言もあったが、これは、先生が普段から児童に向けて学習の目的を伝えている結果なのだと思う。

・個別的・自立的な学びの分量について、「現状がちょうどよい、あまり多くなるのは歓迎できない」という意見があるのが他の取組校と比較してやや特徴的だった。他校では、本校ほど多様な教材や環境の独自な開発はなされず、既存のプリントやワークが中心となるため、時間当たりの課題従事時間があまり高くならない一方、本校では思考や表現を要するなど、「重い」学習になっているのだと考えられる。

・教師の努力や工夫を頼もしく感じているという児童の発言から、児童と先生の信頼関係を感じることができた。

●視察後の意見交換における学校からの主なコメント

・児童がゴールを知らないと見通しを持てないため、学習コーナーには去年からルーブリックを掲示し、目標を先に示すことで、児童が自己評価できるようにしている。

・自由進度学習以外の授業の時にも児童に選択肢を与える場面が増えた。全員が発表するという同調的な形ではなく、チャットを使用したり、グループ単位の発表としたりなど、発表が苦手な子でも参加しやすいようにフォローすることを意識するようになった。

・「準備が大変ではないか」「どのぐらい時間がかかるのか」という質問がよくある。実際、準備には時間がかかるが、それぞれの働き方の工夫や、アクセスフリー化を進めることで解決を図ろうとしている。

・「学習に遅れが出る子がいるのではないか」という質問もあるが、工夫して作られたプリントや発展学習によって効率よく学べるので、そのようなことはない。

●視察を踏まえた委員からの主なコメント

・子供は学ぶ力を持っているということを信じ、その環境を整えて、選択肢を用意し、自己決定を促していけば、子供は、ここまでできるのだということに驚いた。自由進度学習において、子供たちの人間関係は、とても重要な要素であると感じたが、それは学習の中で、さらに培われているということもわかった。

・授業準備は大変だが普段の授業でも断片的にでも自由進度でやる事の必要性を感じた。

そのためには教員のマインドを変える必要があると感じる。

・思春期以降では、この授業形態がクラスの人間関係作りに資する「アイスブレーク的」な意味を持つと感じた。

・教師の授業準備や、子供の知的体力からも、全てが自由進度というのは厳しいかもしれないが、何よりも先生が活き活きしており、学びの専門職のあり方を感じた。

・自由進度学習の成果の背景には、教師による深い教材研究が存在していることを忘れてはならない。

・自分のペースで学ぶため、学び方（問題発見・解決能力、情報活用能力、言語能力等）を段階的に習得させていくことの重要性、教師が集団としてではなく、個の状況を見取り、適切な支援をしていくことの重要性も再確認することができた。

・学びの環境を整備することの重要性を再認識した。準備時間の確保のためにも、教師の負担軽減をさらに進めていく必要がある。

・授業担当者の創意工夫が随所に見られ、感銘を受けた。校内に指導法や教材の蓄積があり、それらを共有して活用できるということも学校としての教育力の維持向上にとって重要である。

・この授業形態では授業者の活動内容が多く、活用範囲が広いため、子供の状況を把握して授業を展開するためには教師の経験が必要であり、教師の学びをどう実現するかが重要である。

３．尾道市立高西中学校　視察

●学校概要

・開校　　昭和 24 年

・生徒数　450 人（令和 6 年 5 月 1 日現在）

●学校の特色

・「選択肢と自己決定」をキーワードとし、多様な選択肢から自分に適した学び方を選択・決定して学ぶ自由進度学習に取り組む。

・令和 5 年度より不登校 SSR（スペシャルサポートルーム）推進校に指定され、「ほっと Room」を整備。「教室に帰すことを目的としない」「学校とのつながりを切らない」などの共通理解のもと、不登校支援を行っている。

●授業・施設見学とその後の意見交換

２時間目を使って実施された２年生（数学）及び３年生（理科）の自由進度学習の授業を見学した。授業では、教師が作成した「学びの羅針盤」と呼ばれる単元計画やワークシートに沿い、子供たちが学ぶ順番を自分で選択しながら、教室のほか、学習室や廊下に設けられた「学習コーナー」や「アクティブコーナー」の課題に取り組む形で進められた。

また、授業見学と併せて校舎１階の PC 教室を改装して整備されたスペシャルサポートルームである「ほっと Room」を見学した。

利用する生徒からは「友達が増えたことがうれしい」という声や、「人との接し方を学ぶことができた」という声が出ている。また、活動の一環として自由進度学習の教材作りも行っている。

授業見学の実施後、生徒と委員との対話を実施した。

教室や学習室において個人や集団で課題に取り組む子供たちの様子

スペシャルサポートルームの視察

生徒と委員との対話の様子

●生徒との対話を踏まえた委員からの主なコメント

・自由進度学習の良いところは、先生に聞きづらいことも生徒同士で聞き合えるという点、自分のペースで学ぶことができる点などが挙げられた。また、教える側の生徒も「自分が今ここまで理解できている」という確認ができると話していた。

・このような授業を行うことができる学級の風土を、生徒は「普通」と言っていたので、日常から生徒同士が語り合える環境づくりがされていると感じた。

・「学校に来る意味」について聞くと、学校に来ることでみんなの発見が聞けることや、大人になったときに役に立つ人間関係が学べるという意見があった。

・先生がいてほしいのはどういうときか聞くと、「人間関係の悩みを聞いてほしいとき」だという答えだった。また、自由進度学習がどうなったらいいかときくと「他のクラスともやりたい」という意見があり、総じて中学生は人間関係をとても大切にしていると感じた。

・学校や進学への不安や期待についての問いに対し、人間関係や学習についての不安要素や校則などへの思いが語られていたが、課題に対してのポジティブな思考や行動に対する意識があまり見られなかった。

●視察後の意見交換における学校からの主なコメント

・中学校で自由進度学習を行うにあたって難しいところ、気を付けているところは「人的環境」作り。中学校では「教科の壁」が課題と言われるが、人的環境の中で生徒理解が進むことで教科関係なく共通の取組として進めやすくなると考えている。

・自由進度学習で授業へ主体的に取り組みやすいという声があがっていることは成果として感じつつも、点数というところに関してはまだ不安がある。

・中学生の発達段階では、「誰かと一緒にいないとできない」など心理的な作用があることが難しさだと思う。

・最初は生徒からも不安の声があり、「最後だけでも先生がまとめてください」と言われ

ていたが、実際にやり始めると意外に身に付くことを実感しているようだった。最初は否定的な意見があったアンケートの結果も、今は肯定的な意見へ変わっている。

●視察を踏まえた委員からの主なコメント

・学ぶ順番や学び方の選択肢を与えられ、その判断を委ねられることによって、子供たちが試行錯誤しながら、自分の学びを客観的に認識している姿が見られた。教師が友達の学び方を紹介したり、日々の自分の学習を振り返ったりすることで、自分の学び方について考えられていることが素晴らしいと感じた。

・理科の授業で準備されていた学習環境について、一見、質・量ともに豊かだと感じられるものの、単元全体で授業を構想すれば、そこまで負担感を感じさせるものではないのではないか。日常の教師の仕事の仕方においてもこのような発想が重要。

・授業で最後まで立ち上がらず、プリントも少し書き進むも、アクティブコーナーにも行かないという子供に対し、先生が５分以上マンツーマンでついて個別支援をしており、この形態の授業の教育相談的側面での機能について考えさせられた。

・多くの中学生にとって学校に通う理由は友人との交流や対話、協調・協働という要素にあるようであり、義務教育では、自立・自律・個別・自己に立脚した学びの推進というより、協調・協働を通して「自立・自律・自己」を育んでいく学び（自己調整・自立した学びをできるようにしていくための協調的・協働的な学び）と考えた方が、実態には近いのではないか。

・SSR の子供たちも伸び伸びと活動しており、通常級との関わりも悪くない状況も確認できた。自由進度学習と併せ、学びが苦手な子にも乗り切り方や居場所があり、大変良い取組だと思う。

・個別最適な学びと協働的な学びの充実や、GIGA 端末の活用を進めるうえで、高校入試の在り方が大きな影響を持っており、その在り方について検討が必要。

・生徒自身の主体性の発揮という観点からは、生徒自身が与えられた選択肢について考え、提案し、共有し、評価して改善するといったことが可能となっているのか、教師の意図により制約のある中での決定が自己決定と呼べるのかを考える必要があるのではないか。